



漢朗詠集

猩翁真筆

上

弘成文庫  
圖書  
漢文部  
第八二號

八二





傳漢朗詠集卷之

春

古春

早春

春興

春夜

子日

竹葉

三月

杏花

暮春

三月盡

同三月



言

露

雨

梅

竹红梅

柳

花

竹落花

踟躅

款冬

蒜

夏

更秋

首夏

夏秋

端午

纳凉

晚夏

花橘

莲

郭云

蟹

蝉

扇

秋

立秋

早秋

七夕



秋興

秋晚

秋夜

八月十五夜

月九月九日

日九月盡

女郎花

蕙

蘭

橙

前栽

紅葉

落葉

鴈

自歸

出

麻

露

霧

檣衣

冬

初冬

冬夜

冬景

爐火

霜

雪

冰

霰

佛名



春

古春

透吹潛雨木待芳菲之後  
春已變將希雨露之思

池凍東頭風度解寒梅北  
面雪封寒柳垂氣力  
微先動池有波文  
冰盡開



今日不知誰計會春風  
吹水一時來

春尚殘  
東寒未盡  
春風吹水一時來

のうらみさくはるすいふたりむとせ  
ふせとやいとむとやいとや  
うらみさくはるすいふたりむとせ  
うらみさくはるすいふたりむとせ  
うらみさくはるすいふたりむとせ  
うらみさくはるすいふたりむとせ  
うらみさくはるすいふたりむとせ  
うらみさくはるすいふたりむとせ

早春

水消田地蘆葦綠  
程去入枝綠柳眼  
乍遠和風輕  
消息續教啼鳥  
說來中  
東岸西岸之柳  
遲遲不同  
荀枝  
小枝之梅  
雨一落已果

雲塵懶  
蕪人奉  
子瑞玉  
寒蘆葦  
眼  
氣晴  
風掃  
新柳  
髮水  
消浪  
洗意  
苦  
頻







笙歌夜月琴瑟酒香風露清  
ま〜 羨乃 北窓人 といふ 海の家也  
ま〜 夕陽 夕陽 夕陽 夕陽  
ま〜 夕陽 夕陽 夕陽 夕陽  
ま〜 夕陽 夕陽 夕陽 夕陽  
ま〜 夕陽 夕陽 夕陽 夕陽

去夜

背燭上憐深夜月 踏花回 惜春  
ま〜 夕陽 夕陽 夕陽 夕陽  
ま〜 夕陽 夕陽 夕陽 夕陽  
ま〜 夕陽 夕陽 夕陽 夕陽  
ま〜 夕陽 夕陽 夕陽 夕陽

子日 付若菜

倚松樹以摩腰習 凡霜之難犯也 和  
葉美 夕陽 夕陽 夕陽 夕陽  
倚松樹以摩腰習 夕陽 夕陽 夕陽 夕陽  
梅毛 拵 以 二月 宮落 花

子日 夕陽 夕陽 夕陽 夕陽  
ちよあゝいゝん 夕陽 夕陽 夕陽 夕陽



ちとせまふしかあれる心もたふよりの終  
果り心かたらくよりの代や物舞  
わのり心かたらく野鳥のえんま  
をそやあられをまきこり

若菜

野中若菜世事推し意心燼下

和養俗人あそく義指

あひつらハワのれつらせしつらをの巻  
あし店のかげもあそくもあそく  
あしのあひつらハワのれつらせしつらをの巻  
あしのあひつらハワのれつらせしつらをの巻  
あしのあひつらハワのれつらせしつらをの巻  
あしのあひつらハワのれつらせしつらをの巻

三月三日 竹花

春未過是桃李水石流仙源何れ又為  
走く若月く之三朝天孫もも桃李  
く哉や家后るる深方様し竹花



水能如也... 地勢早親... 千秋小序... 之尔

烟霞遠近... 水成道字... 初三... 源起... 周年... 後... 霜

礮石... 夜雨... 偷... 濕... 波... 眼... 新... 嬌... 曉... 風

後... 以... 不... 之... 口... 出... 人... 嘆

今... 之... 也... 不... 之... 也... 中... 此... 之... 也... 今... 之... 也... 今... 之... 也... 今... 之... 也...

善春

拂水柳... 花... 香... 滿... 樓... 寫... 古... 之... 春... 征... 翔... 沙... 鶴... 浪... 落... 曉... 花... 好... 呼... 子... 之... 春



金更少時酒樽空不飲也酒空  
刺由若知く日好春在と海さ又ふき  
いふつらにそとれ月もた村の  
をれみくくくくくくくくくく

三月五日

留まきく不馳春帰人并言賦風  
く不空之風起も菊も

竹院君の酒杯空し我醉送秋  
惆悵ま帰留不の秋ふ花  
送春少月動舟中時ふの秋  
君使韶光知多く今宵  
留まき不用美珠因花落  
夕のこころを思ふねと  
さすやとまをれのか



























只正斜 月 楚 子 教 之 詠

池 子 澹 之 藍 海 水 花 光 煥 火 燄 志

遠 見 人 象 花 復 入 不 福 貴 賤 与 軟 疎

豈 日 望 風 高 位 子 類 万 粒 之 珠 深

枝 海 波 表 意 一 入 更 入 之 子

誰 謂 小 志 濃 艷 眩 者 浪 波 復 如 誰

謂 花 不 語 將 漾 激 者 影 動 層

之 謂 之 水 則 澄 女 脫 粉 之 魂 清 氣

欲 禱 之 花 之 蜀 人 說 文 之 病 年 燥

藏 自 何 怨 唯 美 雨 或 母 之 氣 極 似 風

花 花 之 錦 衣 淡 梳 淡 去 在 風 事 光 若

如 藏 春 風 樣 之 巧 北 時 織 之 強 苦 若



眼負蜀山感殊病平身欲盡年  
此句意  
のちのに終るささくはちりせ  
るれはららららのけり  
わつやとのそれいさか  
らららららららららら  
みくのえんやんよの  
らららららららららら  
らららららららららら

落花

落も不語重海樹泣水  
痛目入池

初踏落もおぼほ  
とそと随花鳥一時

春花をく園文  
助く送曉海舞

遠糸講論  
座

落花律格風狂  
及啼鳥訪程南

誰五鳳翔炎  
橙舞下樓柱神  
願階翫

さくららちのさ  
ららららららら  
らららららららら  
らららららららら



とよしまよれあまのなかにいこうらあふら  
よのうらうらあまのなかにいこうらあふら

疎瑠

晩葉尚ほ紅嫩猶秋が初花白髪  
や世人を初まばや今も世に折ひ  
あふいひくるとあまをたむさふいふく  
いふぬをくそあまをたむさふいふく

歎冬

點々雪もあふらうと雪歎冬  
言定む者おぬ拾遺紙に又来り  
かたのたしと神も心いり  
いとわらわらんやまはるをこれ  
わらわらよのやいらあまをたむさふいふく  
ちりしのあふらうと雪歎冬のりり

蘇

此の書は自三子もあまのなかにいこうらあふら



此心藤蔭庭外花は空の竹影中葉を  
たふのうらみくこらく中はよもらるる  
かきくゆ。むらぬ人のこめ  
こまげなるまきのあまのあま  
わられるからみさきうしち

夏

夏夜

宵燈籠は静かなる庭に  
とをるは静かなる庭に  
もれのつらよるは静かなる庭に  
くらもつらよるは静かなる庭に

夏夜

夜を以て静かなる庭に  
昔も右面静かなる庭に  
わ。やとの。まねも  
あつた。静かなる庭に











たけのこもれりあきとあきと  
いれいさきになつてすくすく  
わきしとあきとあきとあきと  
ふふふふふふふふふふふ

花橋

花橋より山雨を梅松も戦ふ風涼  
枝葉もまはれ去る雨は電光石火  
五月まのたれをまらけふれあきと  
はあきの人のあきとのあきと

蓮

風が老をふさぎ蓮は水に舞ふ花  
葉もあきとあきとあきとあきと  
花もあきとあきとあきとあきと  
岸の涼はあきとあきとあきとあきと  
あきとあきとあきとあきとあきと



淨土經目佛名經知法華本殖善根  
えんらんじふのよるふかまわらるり  
何のけいをなすもよとあさむく

郭二

一摩山を照雲外万花水並梅草  
五月やとておほくのちきんほよきん  
あくちのよふあいのこころけき  
いやはらやまらるる知り観  
いなるいふおのほりちり  
さあつあけつたさるんせいの  
いふらつあつそあつとつりたれ

蟹

堂火お花杖とまな早没お物  
菖蒲水傍草知本楊柳風高唐送梅  
明く仍在誰進月光柱屋と  
少時岩狭宮の柱床頭











しらゆけよものそ世の葉こののち  
おきこののそいんをさふらふ

早秋

但幸地者三伏を今も秋と二月より  
花も雨も秋の地相も風涼も夜も  
英東割れんあるも晩涼清も葉も  
秋のしらゆけいくのもあつねこのねわ  
わにのまはうせらるるいよす

七夕

憶得少年むらじ巧作筆頭と願結多  
二日と適逢来叙ふの結く仇と恨  
と夜は明の秋も涼風飄く群  
露有葉の海はと落つては花散る  
風は水も梨葉もあふ及の物海も







蜀茶粥心浮花露枝疎秋信梅香  
うのうなるくはれのかれのきを  
あまのこをのこるるあれ  
あまのこをのこるるあれ  
あまのこをのこるるあれ

秋晚

相思夕之程香古香日野露莎油  
望山遙月從荒軟初花鳥將信辭

をうらもまうりよのれを  
けのくたのれあまのれ

秋夜

秋夜長くくサ成天の雨独く  
紗燈背望歎菊の露雨打空  
暹る海初夜独く星河各曙  
垂子樓中霜月夜林葉を一人長



昔も露涼人を及終宵日やも月影の  
えりしのしられお乃ちさうりた乃  
なつくらむとちまうりかもねんし  
むけいさうはまれらたあきたる  
いつらあさのみさうらむら

八月十五夜の日

糸向えつ子舞と涼く水浦流  
し二十一言流く粉飾

織錦様中に兩相思と字櫛  
衣袖と像流恋ふりて舞

三つお中新月の色この星か故人の  
昔の表まゝの音流水さなほあ顆珠  
十二回中一勝お母夕々好ふあ  
王か若草一松音あつ光



楚波三五月初秋月對之  
自楚首為霜中人與道  
岸白雲遙想鶴潭鞋可  
堪池便是為方是夜清  
多青一酒秋風露之運  
楊貴妃歸夜帝思孝之  
人之心  
小之此心秋のりか  
月

誰人離外入深城  
秋水漲來不肥  
不發新市  
天山不辨何處  
宮金浦  
迷意白珠











心所くこのくものくあつてさるるを  
わらふかーとくあつてさるるを

九月書

縦心諸途為國難首首屈於雲衢  
縱心多憂憂而進何途爽籍在風地  
願目雅隨祥客之以此秋施與左在座難  
又幸業連由海新詞海賦舟江家心聲

さい木のあふしとくをけりる  
とれてり秋のくさくをくものけ  
わもとのひのりあけりる

女郎花

あふしとく美果実信守るめり同り  
あふし契信を恐るる表お首以霜  
をこれくーかぬこれのくあつてさるる  
あやあつてさるるをくあつてさるる











ちりちりさしつゝはくしつとちりちり  
いささかちりちりさしつとちりちり  
ちりちりさしつとちりちりさしつとちりちり  
をくたといつちりちりさしつとちりちり

みぢき ちりちり

石垣江家さまの地みき涼風美雨

白瀬瀨林実春有葉花瑞瑞の序

洞中流沙瑞瑞水蓮と菊繖瑞瑞林

外物獨醒松洞と波合力瑞江群

下葉のちりちりさしつとちりちり  
しりしりのちりちりさしつとちりちり  
ちりちりのちりちりさしつとちりちり

落葉

三杖と宮漏は長空階雨滴美雨  
ちりちりさしつとちりちりさしつとちりちり



杖底不拂獲乃惹杖不沿松相美  
城柳宮槐灣柱落杖也木あまそ人  
松秋朝中つ群と雨之瀧鶴鶴背  
と天片く紅纒糸

樵蕪反杖穿朱買臣之存隱逸  
後遊履海當推他く業

松風落葉今昔思慙心あふ失持琴  
さむくまはあそ月毎胡弄そ流世風  
たふす川 子あふあなるこれあそこの  
やこれあそこのせ吹そ  
かこれあそこのしこれあそこの  
あそこのあそこのあそこのあそこの  
あそこのあそこのあそこのあそこの  
あそこのあそこのあそこのあそこの  
あそこのあそこのあそこのあそこの

鷹 竹海鷹











晴遠人止洋身より憂更に愁心は月  
よりからわらわらむのころか  
をのれちるもあまのこころ  
ゆめゆめとをらむのちか  
こころのうらみや秋とく

露

この初九月初とわらわらむ心は月  
露滴をききあまのこころ  
秋の初九月初とわらわらむ心は月

あまのこころの初九月初とわらわらむ心は月  
秋の初九月初とわらわらむ心は月

霧

竹君は秋の初九月初とわらわらむ心は月  
霧の初九月初とわらわらむ心は月  
霧の初九月初とわらわらむ心は月

霧







かこれにきあけりうきしはしんあき  
しれそぬゆのさうらんきつさ

冬夜

丁亥三き燈さふおあたま主淫酌中甚  
きま元自ぬたあおま客里唯送花を  
らんくしあしあけのさあ  
川一をささむらりあき

舟中

寒流常月流流況り次お霜利似り  
風雲の向人あきま月難征老座を  
けしあおくもあさるんく  
みさけさくくられぬゆめん

爐火

黄醖法醋途冬熱伴北お爐逆あき  
表お遊る程あきあき風あお火あ







雪

曉入第... 暮宮... 山夜...  
夜... 梅... 月... 子... 星...

盤河沙... 梅... 花... 五... 一... 第... 株

多... 驚... 心... 教... 尤... 人... 被... 鶴... 筆... 立... 他... 烟

身... 逐... 風... 少... 返... 心... 振... 聲... 子... 鶴... 之... 元... 之... 齒

晴... 行... 殊... 輕... 緩... 氣... 松... 之... 枝

知... 得... 群... 樓... 浦... 鶴... 心... 在... 案... 出... 梅... 舟... 人

立... 柱... 庭... 之... 以... 為... 鶴... 所... 在... 始... 過... 自... 不... 忍

湖... 芝... 玉... 中... 杖... 扇... 交... 禁... 一... 事... 之... 在... 在... 祥

あ... た... わ... の... ろ... ん... け... ー... と... ん... と... ん... の... け... け...  
け... の... の... わ... ま... と... も... り... や... し... わ... ー... じ...  
け... の... の... け... け... ー... 雪... は... の... け... け...  
あ... ら... せ... さ... し... と... ち... ら... と... ら... け... け... け... け... け...



白雲の如れハきこふにきれり此の如くハ  
いづれをハかかちてきりてゆき

水 身之水

氷封水面固無海雪花林類見有月  
霜如鶴城多そそ露み然然散落之氷  
おまうそ月のもりりきじこれ  
けらうそそまのまのまらうそ

水

氷消見ある多行地宮家寄山盡入樓  
氷消流と應散霜初宮雪軍と不氷  
胡玉雜結介便言の呼他を正思文佳忠  
らけはひみちたはつれそそ  
夜にのほりちそそやうそ

霰

塵身才不皴拜し曉龍領珠板類そそ







